

<随想>現代の書

著者	星 ミユキ
雑誌名	日本文学誌要
巻	61
ページ	90-91
発行年	2000-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020102

現代の書

星 ミ ユ キ

書の専門的な学習は、高校における芸術科書道から始まる。

小・中学校では、文字を正しく美しく整えて書くということを主眼とする書写に、限定されているからである。

高校書道では、まず中国の古典と日本の古典から学び、それらの基本をふまえたうえで創作に入る。創作は唐の四大家（歐陽詢・虞世南・褚遂良・顔真卿）・日本の三筆（空海・嵯峨天皇・橘逸勢）・三跡（小野道風・藤原佐理・藤原行成）の書を基調としたものが主であった。

ところが、数年前からは、古典の学習に加えて漢字仮名交じり書が必修になった。つまり、専門家だけでなく、誰もが読める書を書かなければならなくなったのである。

これは日展を初めとして、大きな公募展でも何割かの割合で出品しなければならなくなった。漢字の大家、仮名の大家が、それぞれの特性を生かして、調和体（漢字と仮名を調和させたもので、連綿は二字以下）を出品している。

わかりやすく説明すれば、極端な例ではあるが、相田みつを

のような、あるいは星野富弘のような文字に類しているかもしれない。それをもっと品よく、美的に調和させたものといえなくもない。

何だか歯切れの悪い説明になったが、何しろ日展五科に属している芸術書道の調和体をこんなふうに論じてよいものかどうか、立派な書家のプライドを傷つけはしまいかと危惧するからである。

ちなみに、高校書道の授業では、この漢字仮名交じり書が一番生徒に好まれる。堅苦しさを排した形式に解放感を覚えるのであろう。

今年の文化祭には、篆書・篆刻・隸書・楷書・行書・草書・料紙に美しく散らした和歌・短冊・扇面の外に、漢字仮名交じり書を展示した。五色（黄・緑・紫・青・桃色）の練習用色紙に、教科書にある小学唱歌の一節などを書かせたうえで、カラフルな模造紙を色紙大に切って、各色に合った自分の言葉や想いを書くという課題を出した。

古典の臨書では元気のなかった生徒が目を輝かせ、「燃えて生きたい」を赤に、「夢の実現」を紫に、「恋をしたい」をピンクに、「友情を大切に」を黄に、「空の彼方へ」を青に、「その日を楽しむ」を緑に、「心の闇」を黒（白い修整液を使って）に生き生きと書いた。

この展示が一番好評だった。生徒同志が互いに批評し合った。他校の生徒がこれは面白いといって、そのコーナーを離れなかったり、各担任が、日頃何を考えているのかわからない生徒の、内面の一端を知ることができたと言ってくれたりした。

ただ年輩の見学者は、こんな書道展を見るのは初めてだと、正直に驚きの色をかくさなかった。昔ながらの謹厳な書のイメージが崩れたからなのだろう。

古典の臨書作品もありますよと、私はたくさんの条幅などの説明もしたが、自分のイメージしていたモノトーンの世界の一角が、カラフルに華やいでいたのに異和感を覚えたのだろう。

この年代の人達の書に対する意識改革はなるのかどうか、固定観念の強さに直面した一場面だった。もっとも現代の書がどう変わろうと、好みは各自それぞれのだからそれはそれでよいと思う。床の間の掛軸には堅い漢字を、茶室には趣きのある仮名の茶掛けを、居間には変化に富んだ漢字仮名交じり書の額を、といったように使い分けている人もいる。

私はどうかというと、漢字仮名交じり書の指導をしながら、平安朝仮名の流れるような美に固執する。草書から草仮名・変体仮名へと次第に変化していった仮名は、四季があり山水画のようにこまやかな日本の風景から生まれたものである。

日本の古典文学書を、草仮名交じりの印影本で読んだ感性が尾を引き、私は今でも公募展作品には調和体を書かない。かたくなに変体仮名の連綿を用いて創作する。千字はあったという変体仮名をどのように配して構成しようか、空間をどう生かそうか、墨色はどうしようかなど、古典の世界に浸りきっている。だからこそ、漢字仮名交じり創作書の字配り、空間の効果など、即座に判断し指導することができるのかもしれない。

ほとんどの書道教師が、仮名の指導が苦手だという。基本を

徹底的に学習していないからであろう。生徒も初めのうちは、仮名の学習をいやがる。書道塾で、押しつけた、いわゆる力強いといわれる筆法しか学んでこないからだ。仮名の筆法は直筆を空間から鋭く入れなければならない。決して押しつけてはならないのである。

しかし、仮名の筆法ができるようになると、百人一首などを料紙にさらさらと書くようになり、その達成感は力強い漢字書の比ではない。和歌に合った色彩や柄の料紙を選んで、魅入られたように書き続ける。文化祭展示の中での評価も高く、玄人はだしだということ、見学者は空んじている歌から変体仮名を拾い読みして楽しんでた。

現代における漢字仮名交じり書は、やはり古典を基調としたものであるといえよう。基本をふまえつつ変化させたものだからである。

文化は言語を初めとして、いろいろな分野が時代と共に少しずつ変化していく。

最近話題になっている創作能「高山右近」もそうであろう。伝統的な能の世界に、洋楽と森英恵の衣装が取り入れられていた。衣装は牧師風、編鐘は教会の鐘の音を連想させた。

現代の書、それを代表するのは今のところ漢字仮名交じりの書であるが、近い将来は、カリグラフィーも取り入れられるようになるかもしれない。時代は少しずつ移っていくのだから。国際的な広がりのおかげで……。

(ほし みゆき・一九七九年卒)